

牧野忠昌名誉館長による特別授業 要旨 「日本人と水産業のかかわりについて」

私は近畿大学農学部水産学科を卒業してから 31 年間水産庁に勤務しました。水産庁にはいろいろな仕事を担当する課がありますが、今日は、クジラの漁業取締りに行った時の話と、マグロの漁業取締りの話をしたいと思います。

これからのお話は、皆さんのおじいさんぐらいの時代の話として聞いてください。

私は今から 44 年前、昭和 44 年（1969 年）10 月から翌年 3 月まで約 6 か月間、漁業監督官として捕鯨船に乗りました。漁業監督官の仕事は漁業者が決められたことを守って漁業を行っているかどうかを監督、指導する事です。この時代はクジラを獲る漁業が行われていました。



昭和 44 年 10 月横浜港を出港。東シナ海を南下し、赤道を通過、インド洋に入り、ここでマッコウクジラを捕獲しました。



当時は船で赤道を通過し、南半球に行くことはとても珍しい事だったので、赤道を通過するときには船の中で赤道祭をしました。赤道を通過する儀式として、神様から頂いたはさみで甲板に張られた赤いテープを船長が切るところからお祭りが始まりました。

その後インド洋でクジラの捕獲が始まります。クジラを発見するために双眼鏡でクジラを探します。クジラは呼吸するときに海面に浮上し、勢いよく一気に吐き出す息で水柱があがります。この水柱を双眼鏡で探します。

捕鯨船（キャッチャーボート）には船を動かす人以外に、砲手が乗っています。クジラをとる専門の人で、「てっぽうさん」と呼んでいます。船の先端には、大砲のようなものが積んであり、その中に大砲の弾ではなく、モリが入っていて、そのモリをクジラに命中させてクジラを獲ります。その捕鯨砲を打つ人が砲手、「てっぽうさん」です。モリにはロープがついていて、撃ったクジラをのがさないようにしてあります。





写真は、モリがクジラに命中し、キャッチャーボートにクジラが引き寄せられてきたところです。

クジラは解体して、生物調査をします。決められた種類のクジラを捕獲したか、体長、オスカメスか、脂肪の厚さ、メスクジラの場合は乳線の厚さ、ミルクが出ているかどうか、などを調べます。



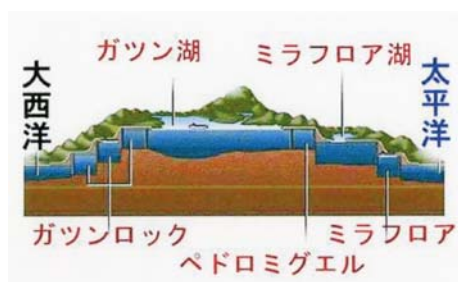
次に、私がマグロ漁業の取締船に乗って、パトロールをしていた時の話です。

今から32年前の昭和56年（1981年）7月、スペインのラスパルマス港から乗船し、大西洋を横断、パナマ運河、ハワイのホノルルをへて、神奈川県の大磯港に入港するまでの69日間の航海でした。

スペインのラスパルマスを7月10日出港、大西洋を西に向かって横断します。7月28日、カリブ海に入り、パナマ運河の入り口に到着。そこでパナマ運河を通過するために順番待ちをします。

その日は14隻ほど順番を待っていたので、夜、運河を通過することになりました。

運河の一番高いところは標高26mの天然湖、ガツン湖です。この湖を利用して、そこまで船を持ち上げるために、このこうもん閘門式運河が作られました。港から他の船を見ていると、山の上に船が上っていくように見えます。閘門に入った時、船が一番低いところにあります。



扉が閉ざされ、水が勢いよく注水されると、船は浮きながら徐々に上昇していきます。この運河を通過するときは夜になってしまったので、周りの景色は見る事が出来ませんが、両岸に生い茂るジャングルからは、熱帯地方独特の鳥の声や虫の音が入り混じっ



て聞こえてきて、とても不思議な雰囲気でした。水路には標識灯がともっており、真っ暗闇ではありません。夜通しの航行が終わり、船は太平洋側の港、パナマ港に到着しました。

パナマを出港し、ハワイに寄港して食料、水、燃料を積み込み、太平洋を一路南下します。その途中、船首前方に白波が立ちました。小魚の大群がマグロやクジラに追われて、水面に飛び出してきています。



船から早速疑似餌鉤（ルアー）のついた釣り糸を出すと、すぐにキハダマグロがかかりました。魚はすごい力で引っ張り、ステンレス製の鉤は伸びきって釣れなかったので、大きな鉄製の鉤に変えて釣り上げました。

そのようなことも楽しみながら、日本のカツオ、マグロ漁船が、キリバス共和国、マーシャル諸島、ミクロネシア連邦の 200 海里操業水域内で安全に、また、規則を守って操業しているかどうか巡視（パトロール）を行い、日本に向けて航行しました。

広い海で操業しているマグロ漁船を見つけると、私が乗っている船から、「水産庁の漁業取締船第 17 丈丸です」と無線電話で呼びかけて交信します。相手の船名、乗組員の健康状態、操業状況、その他必要事項を聞きだし、最後に「あなたの船の安全と大漁を祈ります」と言って交信を終えます。

そして、9月16日、神奈川県の大磯港に到着し、久しぶりで真水のお風呂に入りました。これで、69日間の航海のお話はおしまいです。



日本人はとてもマグロが好きな国民です。日本がたくさんマグロを必要としているため、外国のマグロ漁船はたくさんのマグロを獲って日本に輸出するようになりました。しかし、マグロを多くとりすぎると、マグロ資源は少なくなってしまうので、マグロ資源を守るた

めに、マグロを獲る国が話し合い、漁業管理委員会を作り、マグロの漁獲量を規制しました。

しかし、規制に従う国と従わない国がありました。そこで、世界で一番マグロを消費している日本が中心になり、「このまま好き放題にマグロを漁獲すれば、マグロ資源は将来なくなってしまう、マグロ漁船を減らさなければならない」と各国に伝えました。日本はお手本を示さなければならないので、先頭に立って、たくさんあったマグロ漁船を少なくしました。

このような努力があり、各国も賛成して現在の秩序ある操業が成り立っています。

最後に、この時間の始めにお話したように、日本という国は四方を海に囲まれています。私たちの食生活は海からとれた水産物、魚介類や海藻類など海の恩恵を多く受けています。

海からとれる生産物はその資源をうまく利用すれば持続します。陸上の家畜は、牛、豚、鶏などに餌を与え、人間の手を掛けなければ生産されません。日本は大変恵まれた環境にあることを感謝しながら、皆の力でいつまでも海にある資源を大切にしていきたいと思います。

（平成 25 年 1 月 28 日 長岡市立富曾亀小学校 5 年生 119 人）

子供たちは、迫力のある写真や、実物のクジラの歯とヒゲを見ながら、興味深そうにお話を聞いていました。富曾亀小学校の5年生は昨年11月、「食について考える日」と題して1泊2日の自給自足体験をされたのだそうです。学校に泊まり込み、自分たちで育てた米と野菜だけで生活してみるという体験学習でした。そのような学習をした後での今回のお話、食べ物や資源の大切さをより深く心に刻んでくれたことと思います。



担当：長岡市立科学博物館